

# カルナ(個性)のヒーローアカデミア

クルミ割りフレンズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは神話では無い。これは英雄譚では無い。しかし少年は英雄の力を持ち合わせていた。その英雄の名はカルナ。施しの英雄と讃えられた太陽の化身、スーリヤの子。

その大きすぎる力を持つ少年は《ヒーロー》に憧れたのだ。  
これは少年が夢へ至るためのその途中の物語り。

※あらすじを変えました。姉に見られて何これダサイと言われたので無い知恵絞って書き直しました

## 目次

プロローグ&主人公設定	1
太陽は漸く動き始める	4
英雄の個性把握テスト	12
芦戸三奈にとってカルナという存在	20
戦闘訓練	24
戦闘訓練後とカルナの個性	36
主人公設定2+@設定	40
学級委員決めと雄英高校校長	42
USJ：不穏な嚙矢 前編	47
USJ：不穏な嚙矢 後編	53

## プロローグ&主人公設定

この世界には「個性」と言われる超常が存在する。「個性」とは今日まで提唱されている自然界の物理法則を無視する特殊能力である。例えば、大規模な発電器官を持っていないにもかかわらず強力な電気を発生させる、物体に触れる又は触れなくとも物を宙に浮かすなど多種多様な個性が確認されている。

ある時を境に突然にこの個性を持つて生まれる者が爆発的に増えた。個性の正体、そして何故そんなモノを持つて生まれるようになったのか今現在でも解明されていない。

しかし社会はその現象に適応し、今や5人に4人は個性を持っているという超常社会へと進歩した。

しかし人間とは弱い存在であり、どんなに素晴らしい力であってもそれを悪用する犯罪者は出て来たのだ。そんな犯罪者達を総じて「<sup>ヴィラン</sup>敵」と呼ぶようになった。それと対を成すのが「プロヒーロー」と呼ばれる職業である。

国家資格たるヒーロー活動認可資格免許を持つ者をそう呼称するが稀に無資格でヒーロー活動を行う者がいる。とは言っても無資格のヒーロー活動は犯罪である為取り締まりの対象になっている。そんな社会であるが故に民衆の数多くがヒーロー達に強い憧れ、関心を持っている。かく言う俺自身もその内の一人であることに間違いは無い。

そして俺はその道に第一歩を歩む為に日本有数のヒーローを排出する育成機関【**雄英高校**】に向けて家を出ようとしている。今日はその受験日だ。

「忘れ物はしていないか？お前に限ってそんな事はないと思うが…。」

「大丈夫ですよ、この子しっかりと一週間前から準備していたもの。それでしょっ。」

「ああ、受験票やその他必需品は既に確認している。心配せずとも安心するがいい。それでは父上、母上行ってくる。」

「行ってらっしゃい、カルナ！」

俺の名は【陽神カルナ<sup>ひのかみ</sup>】、誇るべき養父母より俺の憧れた英雄の名を授けられヒーローに惹かれた者の一人である。そして俺は両親の声援を背に雄英高校へと歩みを進める、自身の名と個性を改めて背負いながら。

陽神カルナ 個性：【英雄再演・カルナ】



主人公&オリ設定解説

名前：陽神カルナ

個性：英雄再演・カルナ

出身中学：摩羅羽羅中学校

誕生日：6月21日（15歳）

身長：178cm

好きな物：友情・努力・和解

CV：遊佐○二

本作の主人公、Fateのカルナ（ランサー）と大体は同じような事が出来る。

スキルや宝具、武芸も全て個性として所持している。ぶっちゃけこの世界観の中でもかなりの強キャラだがFateのカルナと大体同じ性格である為自身の力に誇りはあっても驕りや慢心は持っていない。

見た目や性格が個性の影響を受けているため結構目立つ。武芸も確かに個性によって授かっているがそこに慢心せず一部オリジナルの動きを取り入れており、日々の鍛錬は欠かさない。

近所ではかなり有名で迷子の子ネコを捜す、お年寄りの手を引いて横断歩道を渡る、個性不適切使用者を個性を使わずに武芸と腕っぷしだけでその場で取り押さえる等という逸話をいくつも持っている。しかし非常に謙虚であるため全て善意かつ無償でやってしまう。カルナさんぐう聖。欠点としては時たまカルナ語や貧者の見識が出てしまい誤解を生んでしまう事。戦闘時には自動的に服装がカルナ（ラ

ンサー)の物になる。

相違点は宝具【日輪よ、死に随え】を使用しても無敵の鎧【日輪よ、具足となれ】は消失しないということ。一時的に使用不可になるだけで数日のインターバルで使用可能になる、その為【日輪よ、死に随え】は再発動が可能。英雄カルナが半神であるのに対してカルナは人である為神性は所持していない。

個性：英雄再演

本作オリジナルの個性。突然変異系で分類としては異形型に近い。歴史・物語り上の英雄、偉人の力の一部を発現させた個性。

カルナの場合は英雄カルナの槍の逸話の部分が個性として発現しており、一部の力とは言え英雄カルナに成っている為に異形型に近い個性である。カルナ以外にも他の英雄再演持ちが居たとされるが今のところ登場させる気はない。

## 太陽は漸く動き始める

幼少の頃より言い様の無い渴望や不足感を感じていた。生活に支障を来すようなモノでは無いがそれでもやはり気がかりではあったのだ。言うなればパズルの最後のピースが見当たらない、と言えまいだろうか。

個性診断の為に病院に赴いた時には個性はあるのだろうか個性が何か分からないと言われた。しかしその時何かに触れたような気がした、それが何なのか分からなかったが並行して一つの疑問が生じた。何故自分の名がカルナなのか？という疑問だ。別に自分の名に不満は無かったし何なら両親に授けられた最初の贈り物とも言える名は物心付いた時より誇りと感謝を感じていた。だからこそ気にならなかった自身の名<sup>カルナ</sup>の意味を父上に問うた。

そして知った、父上と母上はインドの叙事詩「マハーバーラタ」が好きなのだ。そしてその物語りに登場する英雄の名がカルナであり俺の名の由来なのだ。凄まじい衝撃を感じたのを覚えている。

父上に当時の事を聞かされたがあまり我が儘を言わず子供らしく無かった俺がほぼ初めて言う強請りだったのだと、只管にマハーバーラタを読んでくれとせがんだと聞かされた。

当時俺が何を言っていたのか殆ど覚えていないが、強い飢餓感を感じたのは覚えている。それ程の事だったのだろう、そして庭先で父上にマハーバーラタを読み聞かせて貰ったのだ。読み終わった後にはとても満足気な表情をしていたらしい。

それも当然と言えるのだろう、漸く最後のピースがカチリと嵌ったのだから。その後俺はふと立ち上がると急に炎に包まれたのだ。我が身を焼き尽くす業火では無い、ただ偏に祝福と温かな揺り籠のような優しい炎だった。炎が晴れた時には肌に張り付く黒い衣に否が応でも目を引く黄金に輝く鎧を纏っていた。初めて己の個性を自覚したのだ、自身の個性が英雄カルナの力の一端だと言うことを。

そして急ぎ病院に駆け込まれ検査され自身の個性の詳細を聞かされた、曰く「英雄再演」と呼ばれる個性の一つであり実際に存在した

か否かに関わらず過去の英雄・偉人の力の一端を内包しているのだと。そこからだろう、今現在の俺が形成されていったのは。その日から今日まで鍛錬を欠かした事は無かった、奇しくも両親から送られた名と個性名の一致、単純に運命と言うものを感じてしまったのだ。

だからこそカルナに恥じない人間に成りたいと思った、いつしかソレが当たり前になっていった。

そしてやはり未だに理解出来ていないが周囲からは俺は超が付くお人好しなのだ、俺は謙虚で善性の塊だと。しかし俺はそうは思わない。俺はただ英雄カルナに憧れその後知ったヒーローと言う者に惹かれた存在であり、俺が成して来た事は俺の傲慢、我欲に過ぎないのだ。

その事を知人に説明した所（「カルナさんっ！そういう所つスよ！」）等と言われた。つと考えこんでいたら着いたようだ、雄英高校の試験会場前だ。やはり国内有数のヒーロー育成機関か、俺と同じ受験者達が数多くいる。当たり前だが見た事のない制服も数多い、文字通り全国から来ているという事なのだろう。む？肩が誰かにぶつかってしまったようだ。

「あっ！ぶっめんね〜！試験前で興奮して周りが良く見えてなかったんだ！」

「こちらこそ周囲に気を取られていた、其方だけの不注意では無いが故に俺にも非がある。謝罪しよう、すまなかった。」

快活、と言う桃色の肌と髪に触覚を生やした黒の目と金の瞳を持った少女に頭を下げると面白そうにクスクスと笑う。

「どうした？俺は何か間違っていたのか？」

「あはは！ごめんね、違うんだ。喋り方がちよっと堅苦しかったからソレが面白くてきー！」

「別に謝る必要はない、知り合った者は個人差はあれど皆俺の口調に何かしら反応する。この口調は俺の素である為今更変えたくは無いのだが…。」

「別にいいんじゃないかな、こうして話してみると君に似合ってるし。あつ、名前言ってなかったね！アタシ芦戸三奈っていうんだ、よろし



くね！」

「む、こちらも名乗っていないかったな。改めて俺の名は陽神カルナだ。今日はお互い雄英受験生ということで競い合う仲だがよろしく頼む。」

お互い名乗り合うと握手を交わす。二言三言交わしこれも何かの縁だからと友達になろうとお互いの連絡先を交換する。俺はやはり運が良いようだ、こうして受験日という本来なら緊張と焦りが襲う日にこんなにも気さくで話していて気持ちの良い相手と巡り会い剩れ友人となれたのだから。

俺と彼女はお互い受験頑張ろうと励まし合い会場が別な為途中で別れた。

さて、今日ばかりは友人とは言え他人ばかり心配は出来ない。別にヒーローに成るには雄英しか無い、という訳ではないがやはり国内トップというならそれだけ猛者達が居るはずだ。俺も実力者である事は疑っていないが上には上がいるという。

今より更に己を鍛え磨けるというのだ、心躍らない筈が無い。雄英と比肩するならば他にも士傑高校があるが距離というなら雄英の方が近かったのだ。受験会場に入ると既に7割型が到着している、そして何人かは浮かかない顔をしている。それは仕方無いというモノだろう、【東の雄英。西の士傑】と称されるその片方に来ているのだ。かく言う俺もまったく緊張していない訳では無い、適度な緊張はする気は無いが慢心を抑制する。

俺は漸くスタート地点の一步前に来ただけだ。ここで躓くようではヒーローなど夢のまた夢というやつだろう。

筆記は問題ないと思われるが、はてさて此処からどうなるか。事前の通達で実技試験があると伝えられている、体力テストや戦闘力だが。

考えていたら教員が一人舞台上に立ち説明を始める、彼はプロヒーローのプレゼント・マイクだな。知人が良く彼のラジオを聞いていた

な、時折便りが読まれると喜んでいた…6割がた炎上というのをしていたが。

ふむ、どうやらロボットを相手にした戦闘試験らしい。それぞれにポイントが割り振られており倒せば倒すだけ加点されて行くようだ。しかし、中には0ポイントの敵が存在し所謂お邪魔虫だという。…0ポイントか、気がかりだな。こういう時の勘はよく当たるものだ、頭の隅に置いておこう。

受験生はそれぞれいくつかの会場に分かれて受験するようだ、遅れないように俺も移動しよう。

会場に着いたが見た所ビル群が立ち並んでいるな、一つの町だと言われても納得できるな…人の気配がしない以外は。さて、来るな。

「スタートオ!!!」

試験開始の合図と共に炎を纏い戦闘衣を身に纏い会場内に入り目に付いた敵を槍で切り裂き焼き尽くす。スタートダッシュは決められたようだ、未だに会場前で呆然としプレゼント・マイクにもうスタートしていると改めて伝えられ俺以外が初めて動き出した。

そこからは戦闘とも言えない戦闘が始まった。いくらロボットといえど此方の裏を搔く事すらなく視界に入れば無作為に来る猪武者だ。薙ぎ払うだけで事足りる。

ポイントを稼ごうとした緑がかった髪の毛の生徒の獲物を獲ってしまった事に罪悪感を感じるがこれも試験なんだと割り切る事にした。ここまでは順調だ、途中から数える事を辞めたが80Pはあるだろうか?しかし、こうして飛び回っていたが倒した敵倒された敵の残骸を確認したがどれも既に見知った種類だ。つまり0ポイント敵が無い。0ポイントなのだから相手をする者もそういないのだろうか、それならそれで居る筈だ。必ずしも存在する訳では無いのか?

すれ違い様に敵を倒しながら考え込んでいたら背後で轟音を響かせながら巨躯が姿が現した。なるほどこれが0ポイントか。

その頃雄英の教師達が会しているモニター室で受験生達を吟味し

ていた。此処はそれぞれの会場での受験生達の動きを見ている。期待されている者、見切りを付けられている者という風に評価されている。

「そろそろ良い頃合いだね。この実技試験は受験生に敵の総数も配置も伝えていない。限られた時間と広大な敷地、そこから炙り出されるのさ。状況をいち早く把握する為の情報力、あらゆる局面に対応する機動力、どんな状況でも冷静で居られる判断力、そして純然たる戦闘力。市井の平和を守る為の基礎能力がポイント数っていう形でね。」

獣のような見た目の教師が言うത്それを合図とするようにボタンが押される。0ポイントの巨大ロボットを起動させるスイッチだ、此処からどう動くのか見どころである。

「ふむ、それにしても陽神カルナ君か。スタートダッシュを決め次々と敵を沈めている。はつきり言つて未恐ろしいのさ！はつきり言つちやうとこの子はもうこの時点で完成しているのさ！」

（そして個性は英雄再演か…この個性が最期に確認されたのはもう何十年も前だね。歴史上で語られた英雄の力の一端を発現させる個性、この時点でもかなり強い個性だけど神話の中でもかなりスケールの大きなインド神話の施しの英雄カルナの力だね。資料を確認してもこの子はかなり善人だね、誰かの為に何かを成せる人間はそういないからね。それだけが救いだね、使い方を間違えればそれこそ英雄カルナの力なんて大惨事なのさ☆）

想定していたよりも聊か大きいのがこれといった問題はない、ここで退く気は無い。ポイントは十分稼いでいる、ならばコイツを倒してもロスにはならないだろう。放っておけば受験生達の命までを奪いはしなくともこの大きさだ、余計なパニツクを招き想定外の怪我というのが出るやもしれない。

む？あの受験生はあの時の…成程、瓦礫で足を取られた少女を助ける為に向かつて行ったという訳か。取り敢えずあの少女を救助する事が先だな。あの少年も無作為で行った訳ではあるまい、アレを倒せる何かがあるが故に行つたのだろう。

瓦礫を取り除き、患部を見る。

「瓦礫に足をやられているな。ふむ、折れてはいないが悪化しないように固定しておくぞ。」

「あ、ありがとうございます。ってさつきビュンビュン飛んでた人！お願いします、あの人を助けに行ってください！」

戦闘衣の一部を破り取って彼女の足を固定するとそう叫ぶ。

「それは出来ない、奴はお前を助ける為に他の者達は足竦む中でとび出して行ったのだ。ここで俺が横槍を入れれば奴の意志を無碍にする事になる。奴とて無作為で行ったわけでも無いだろう、跳躍であれだけ跳べるのだアレを倒せるだけの手段は有しているのだろう…尤も制御は出来ていないようだが。」

とび出した緑髪の少年の足を見ながら言うと彼女もそれに気付いたのだろう。先ほどよりも更に青ざめている、がどうやら奴はやり遂げたようだ。巨大ロボットを殴り飛ばし破壊してみせたのだ。

しかし殴った腕は見るも無残な事になっている。骨折どころか粉砕しているだろう。痛みにも絶叫しながら落下している左腕を力まかせに何かしようとしているが制御出来ないのなら先と同じ結果になるだろう。

「お願いします！あの人を助けて下さい！お願いします！」

そう声高に請われれば助けるしかないだろう、元より怪我することが分かっているのなら無視する事も出来ん。

「了解した、奴の戦いは終わったのだから今度こそは助けよう。少女よお前は降ってくる瓦礫に当たらぬように避難しておくがいい。立てるか？」

「大丈夫です！お願いします！」

あともう少しだ、デトロイトスマッシュを使えば左腕は壊れるけどどうにか助かる筈だ！ってあれ？急激な落下を感じていたのに緩やかにになっていた。

って、えっ!?!この人ってさつき会った人だ。僕を助けてくれたのかな。

「先の蛮勇、見事だったぞ。次に使う機会があればその時は制御を覚えることだ。」

「すすみません！助けてもらってありがとうございます！」

「気に病む事は無い、謝罪するのなら俺の方だ。少し前にお前の獲物を獲ってしまった。すまなかった。」

「そんな事ないですよ！これ試験ですし、こうして助けてもらいましたし。だから君も気に病まないでください。」

「了解した、下に降りたら先ずは壊れている腕と両足の応急手当だ。」

「え？アイタタタタタタ!!そういうえば僕怪我してた！」

「まったく大丈夫ではないがこれ以上悪化はしないだろう。残り時間少ないとはいえ今すぐに棄権し適切な治療を受ける事を進言する。」

「でも僕のポイントだから！せめて1ポイントはとらないとだから！」

しかしそこで無慈悲にも試験終了の合図がかかる。少年は絶望した表情をしながら気絶した。緊張・疲労・怪我・脱力によって気絶したようだ。命に別状は無い。

そうこうしている内に医療班が到着したようだ。背の低い老婆が周囲の受験生達に甘い駄菓子を配っている。成程彼女が雄英高校が抱える医療教諭のリカバリーガールか。

「グミだよ。はい、グミをお食べ。」

「リカバリーガールとお見受けする、此方に両足と右腕の重傷者と瓦礫による片足の軽症者がいる。先に診てもらえないだろうか。」

「はいよ、ああそれとアンタにもグミをあげるよお食べ。」

「ご厚意感謝する、ありがたく頂かせて貰おう。」

「ふむ、どっちも応急処置はされてるねえ。アンタがやってくれたんだらう？ありがとね。」

「あの、本当に私とこの人救ってくれてありがとうございます！」

「どちらも礼には及ばない、が素直に受け取っておこう。それに俺はヒーロー志望だ、目先で要救助者が居るのなら救けにいくのに躊躇いは無く理由はそれだけで事足りる。次にまた会えたならその時はよ

ろしく頼む。」

言いたい事を言い終わると俺はそのまま会場を後にした。後日試験結果が自宅に届くという事で帰宅した。

「私が投影されたあ!!」

後日自宅に届いた試験結果の封筒を開けると中に小型の機械があり、起動させると先ほどのようにオールマイトが投影された。俺とした事が想定外の事で驚愕している。

「やあ陽神カルナ君！何故私オールマイトが映っているかと言うとだね、実はこの春から私が雄英高校で教師になるからさ。手っ取り早く結果を言うと合格だよ！筆記は余裕で合格ラインを越えている、実技試験では82点で堂々の1位だよ！おめでどう、と言いたいところだけど実はもう少しあるんだよ。82点の部分はあくまでも仮想敵を倒した事による加点なんだが実はもう一つ評価基準があつたんだ！その名もレスキューポイント！これは誰かを助けたりする事で評価される項目なんだ！人助けをしたのに評価されないなんてヒーロー科としてあってはならない事だからね。陽神カルナ君！君のレスキューポイントは50点！先の82点と合わせて合計132点だ！これは歴代の雄英試験結果でも堂々の1位だ！来いよ、雄英は君を歓迎するぜ！」

漸くだ、漸く俺はスタート地点へと動きだせた。

両親に結果を伝えるととても喜んでもらえた。俺は感情を表に出すことがあまり得意では無い。俺にそれだけの技量があればそれこそ手放して喜んでくれるのだろう。ああ、しかしなるほど。これはとても良い気分だ。

## 英雄の個性把握テスト

前もって丈合わせで袖を通してはいえ、こうして新しい制服を着るのも感慨深さを覚えるな。合格発表から幾日か過ぎ、俺も今日から雄英生ということだ。これだけの事でも心高ぶり胸躍るとは俺も中々新しい環境を楽しみにしているようだ。

あの日出会い連絡先を交わせた三奈も合格していたようで、クラスも同じA組らしい。会える事が楽しみだ、入学する前から知り合えた友人と同クラスに成れるとは幸先が良い。連絡し合う内に向こうから三奈と呼んでくれと言われ、それならこちらもカルナでいいと伝えらると「カルカル」なる渾名を付けられた。知人友人からは終ぞ渾名は付けられなかった為初めて事でより喜びは大きくなつた。俺が通学する事を楽しみにしているのもこの事が一因なのだろう。やり取りとしてはこんなものだ。

『おはよう、芦戸。今日は晴れていて温かく良い日和だな。先日雄英高校より合格通知が来たのだが、芦戸の方はどうだろうか？』

『おっはよくー！陽神！おめでとう！アタシも合格してたんだよ！入学してからも一緒に頑張ろうね♪ちなみにアタシはA組だったよ！陽神は？』

『そうか、お互い合格出来てなによりだ。おめでとう、俺もA組だ。同じ学び舎に通えるだけでは無く同じクラスに成れた事、心から嬉しく思う。改めてよろしく頼むぞ芦戸。』

『うん、よつろしく♪それとき、芦戸なんて堅苦しくしないで三奈と呼んでよ。』

『了解した、ならば俺の事もカルナと呼んでくれ。親しい者は皆下の名で呼んでくれる。』

『オツケー、ならカルカルだね！こっちこそ改めてよろしくねカルカル！』

『渾名というものか、初めて付けられたがカルカルか。悪くないな、こういうものも。改めてカルカルとしてよろしく頼む。』

『アハハハ！カルカルおもしろーい！』

「というような具合だ。その後一言二言やり取りした。」

また俺は自宅からだど距離の問題がある為近場にアパートと借りる事にした。両親共に笑顔で送り出してくれた、叙事詩の英雄カルナは数々の不幸に見舞われたがどうやら運までは個性に影響されないようだ。ここまで俺は沢山の幸運に恵まれている。月に数度犯罪者に出会うが両親が習わせてくれた武術によって個性に頼らずとも抑え込む事が出来る、プロヒーロー達には苦笑いされるがな。実に俺は幸運だと感じる。

さて、そうして考えていたら着いたようだ。やはり大きな、さすが国内最大のヒーロー教育機関という事か。

「カルカルくおはよう！」

「む、三奈かおはよう。今日は良い入学日和だ。」

「だね、カルカル何か楽しそうだね？表情にはあんまり出てないけど。」

「分かるか？実際昂っているよ。ここは唯の教育機関ではなく雄英だ、入学式も普通だとは思えなくてな。こういう時の俺の勘は良く当たる。」

「へくそういう個性なの？未来予知とか？」

「いや、俺の個性は別にある。単なる勘だ、外れる事もあるが当たる事の方が多い。」

「マジで？やっぱりカルカルって只者って感じしないね。あつ着いたよ、ここがA組だね。」

「その様だ、では入るとしよう。」

ふむ、扉も大きいのだな。個性の影響で大きな体躯をしている者を慮っているが故か。中に入ると既に着席している者もいるようだ。

む、一人こちらに気付いたのか此方に歩み寄ってくる。見るからに真面目と言う言葉が似合いそうな男だ。取り敢えず挨拶だな。

「おはよう、良き日だな。俺の名は陽神カルナ、摩覇羽羅中学出身だ。これからは共に切磋琢磨するだろう、よろしく頼む。」

「アタシ芦戸三奈！よろしくねくメガネ君！」

「二人ともおはよう！俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ！これから



よろしく頼むよ。」

「ああ、共に競い合い高められる事を願おう。俺の席は…。」

「陽神君は一番左側の前から2番目、芦戸君は一番右側の一番前だ。」

「ありがとう飯田（！）。」

そこで別れ、俺と三奈はそれぞれの席に着くが飯田は後から入って来たガラの悪い男が机に足を上げた為注意しに行った。因みに俺の前の席だ。言い争いをし、ガラの悪そうな男が凡そヒーロー志望とは思えない無い発言をすると飯田が絶句した。成程流石雄英といった所か、このように見えてもこの男は入学出来るだけの資質を持っているのだろう。侮れんな、一筋縄では行かない事を再確認した。

また一人入って来たようだな。飯田がすかさず挨拶しに行った。む、奴は実力試験の時の…無事入学出来たようだ。あの時0ポイントだと言っていたから筆記とレスキューポイントのみで合格したという事か。

「おはよう、俺の名は陽神カルナだ。あの時以来だな、お互い名乗れなかったがこうして共に同じ学び舎に入れたことを嬉しく思う。」

「君は僕を助けてくれた！僕、緑谷出久って言いますよろしくお願いします。」

お互い頭を下げた挨拶を交わしていると何やら飯田が合点がいったようだ。

「そうか俺達は同じ試験会場だったな！緑谷君、俺は君の事を見誤っていた！君はあの試験の構造に気付いていたのだろ、悔しいが君の方が上手だったようだ！」

「あー!?あの時ビュンビュン飛び回ってた人ともさもさ地味目の人！」

急に緑谷があたふたし始めたが女子とあまり話した事が無いのだろうか？取り敢えず挨拶だ、挨拶は重要だ。

「おはよう、俺は陽神カルナだ。足はその後大事無いか？」

「おはよう！私は麗日お茶子！もう大丈夫だよあの後お婆さんに治してもらったから！」

「それは何よりだ、緑谷取り乱し過ぎだ。落ち着くがいい。」

俺が緑谷を諫めた後緑谷と飯田が麗日に挨拶と自己紹介を行い、そのまま歓談を始めた。しかし…。

「悪いが歓談中失礼する、この寝袋に入った男性をお前達は知っているか？」

「「え？」」

俺以外のクラス全員が俺が指さした方向を凝視した。途中から入ってきたが邪な気配がしなかったからスルーしていたのだが、皆が付いていなかったのか。そして寝袋の男性が出てくるとゼリー飲料を飲み干し、俺を面白そうな物を見つけた目で見てきた。

「へー、気配は完全に絶っていた筈なんだがな。何時から気付いてた？」

「最初からだ。気配は消して侵入していたが邪な雰囲気は感じられなかったので敢えてスルーしていた。この学校の教諭の方とお見受けする。」

「君中々やるね、それにしても君達が静かになるのに8秒かかったよ。時間は有限、君達は合理性に欠けるね。担任の相澤消太だ よろしくね。早速だがコレ来て運動場に出ろ。」

運動着を取り出し言いたい事を言い終えるとそそくさ出て行った。差し当たって皆に相澤教諭の指示通り動くことを進言し、運動場に向かう。それにしても今回は俺の勘が当たったようだ

相澤教諭の話を漸くするとこれから行うのは個性を使用しての体力測定のようなものだ。俺は別に構わないが入学式やガイダンスが無い事に不満を表す生徒も居た。その事への反論は雄英高校は自由な校風が売りだがそれは教師陣もまた然りというものだった。成程的を得ている、つまり俺達の在学退学も教師陣の手の上という事だ。面白い、これが雄英か…！

「実技入試成績のトップは陽神だったな、中学の時のソフトボール投げ何メートルだった？」

「239メートルだ。」

俺の発言に周囲は驚愕の目を向ける、あのガラの悪そうな奴は親の仇を見るような目つきで睨んできたが。そんなに以上だろうか？俺の出身校では割と200メートル台は居たのだが。

「それ、個性使っていないよな？」

「無論だ、俺の出身校でも個性の使用は禁止されている。」

「お前さんの出身校は…成程な摩覇羽羅中学か、それなら納得だ。」

『納得しちゃうんだ！』

「んじや個性使っていないから投げてみる。」

「個性を使用すると服装が変わるが構わないか？」

「線から出なけりや何しても問題ない、良いからさっさと始めな。」

「了解した。」

許可を得たため炎で身を包み戦闘衣が変わる。また驚愕されたな、緑谷・飯田・麗日を見た事がある為周囲程驚いていない。ボールは見た所かなり頑丈に作られているようだ。これなら俺が全力で投擲しても消し炭にならずに済みそうだ。

「では…、ハアツ!!」

肘部分から炎を放出させその勢いを利用し、今俺が出来る全力で投球した。その結果辺りに突風が巻き起こったが然して問題では無い。「す…っげえ。」

「何だよ…今の。あんなの出せんのかよ。」

「カルカルすつごーい！」

「先ず自分の限界を知る、それがヒーローの素地を形成する合理的手段。」

陽神カルナ 記録3405. 8メートル

いくら個性を使用したとは言えカルナが叩き出した驚異の記録に芦戸以外は皆呆然としている。

「3000って3キロって事かよ!?!」「なにこれ面白そう!」「個性を思いっきり使えんだ!さすがヒーロー科!」

皆口々に感想を言っているが興奮するのも仕方が無いというものだろう。…む？

「ヒーローに成る為の三年間、そんな腹積もりでいる気かい？ 決めたよトータル成績最下位の者は見込み無しとして除籍処分にするでしょう。」

『ハアアアア!?!』

「ようこそ！これが雄英高校ヒーロー科だ！」

これが雄英のヒーロー科！面白い、此処なら己を更なる高みへと上げらせられる！

2種目目 握力測定

「540kgつてアンタゴリラ!?!いや蛸か？」

「蛸ってなんかエロいよね。」

「いや、俺よりあちらの方が…。」

「握力計が、壊れた!?!」

「本気で握ったら破壊してしまった。」

陽神カルナ 握力記録 ∞

第3種目 反復横跳び

「早すぎて、見えなかった。」

カルナは左右から炎を噴出させて動いた。しかし早すぎて記録不能

その後カルナは自身が現在出せる全力でもって驚異的な記録を叩き出していった。

「お疲れ、順位の発表は口頭なんて合理的じゃないから一覽で出すぞ。」

カルナは自身の順位を確認する。 陽神カルナ 1位

皆全力を出した、しかしそれをカルナは悉く上から驚異的な記録を叩きだしていった。英雄の力、カルナのこれまでの鍛錬は伊達では無かったということだろう。

「因みに除籍は嘘な。」

(。 ㇿ ) ポカーン

「君らの全力を最大限引き出すための合理的虚偽だ。」

「あんなの嘘に決まってるじゃない、ちよつと考えれば分かりますわ。」

((分からなかった。))

「これにて終わりだ、教室にカリキュラムがあるから各自目を通しておくように。」

そう言うのと相澤は去って行った。取り残された生徒達はそれぞれの思い思いを口にする。

「いやーそれにしてもヒヤッとしたよな。」

「そうそう、一時はどうなるかとおもったぜー。」

「ホントホント！嘘で良かったよ。それにしてもカルカル凄いな！殆どの種目で1位だよ！」

「陽神カルナだったよな？俺切島鋭児郎ってんだよろしくな！芦戸の言う通り本当にすげえよ！」

「陽神カルナだ、切島鋭児郎だな。俺の事はカルナでいい、こちらこそよろしく頼む。お前達の賛美はありがたく受け取ろう。しかしこの結果は俺のこれまでの鍛錬があったからであり、思った通りのパフォーマンスが出来たのが僥倖だった。」

「くう〜！自分の実力を誇示せずに謙虚だなんてかっこいいなカルナ。それと俺の事も鋭児郎でいいぜ！」

「了解した、鋭次郎。それと三奈、相澤教諭は嘘は言っていないかったぞ。」

「えっ?？」

カルナのその一言で場の空気が凍り付いた。

「え?で、でもさ相澤先生自分でこれは合理的虚偽だつて言ってたじゃん。」

「陽神さん、そのお話本当ですか?」

「お前はたしか…八百萬 百ですわ、よろしくお願いいたします。」よろしく頼む陽神カルナだ、カルナで良い。」

「それでカルナさん、先ほどのお話ですが…。」

「事実だ。証明は出来んが俺の個性の一端でな、俺の前では全ての虚偽・隠蔽の類は意味を為さない。」

「カルカルの個性って炎を出すことじゃないの？」

「それも俺の個性の一端でしかない。この黄金の鎧もその一つだ。」

「それでは相澤先生は…。」

「途中で見込みがあると考えたから嘘という事にしたのだろう。」

カルナのその言葉に場は再び静まり返った。特に最下位に近かった峯田や最下位だった緑谷は自分はギリギリの綱を渡っていたのだと考え青ざめた。

カルナは再び炎を纏い元の運動着に戻った。

「取り敢えず、皆着替えて教室に向かおう。それと緑谷、医務室まで見送ろう。」

「えっ、でも。」

「俺もお前に話したい事があるから丁度いい。行こう。」

その場に残っていた者達はカルナ達を見送ると共に、先のカルナの発言による相澤の真意と自分達と1位であるカルナとの実力差を感じて反省会をしようと決めたのだった。

## 芦戸三奈にとってカルナという存在

アタシは芦戸三奈！将来は皆が憧れるヒーローになるのが夢なんだ。そんなアタシに最近男子の友達が出来たんだ。名前は「陽神カルナ」っていつて今はカルカルって呼んでるんだ！最初会った時は英雄を受験しに行った時なんだ。アタシの不注意で肩がぶつかっちゃったんだ。こっちが謝るとカルカルも自分も不注意だったから気にしないでって言うてくれたんだ。

最初の印象は不思議って感じだったね、髪も肌も白くて細身なのに不健康さを感じないんだよね。今なら分かるけどカルカルって細いは細いんだけど筋肉はしっかり付いてるんだよね。細マッチョとかじゃなくてメチャクチャ引き締まってて無駄が一切無いって言えばいいのかな？それに顔もイケメンだよ、カッコいいのはカッコじゃ上手く説明出来ないんだけど兎に角不思議な雰囲気纏ってた。言葉使いも堅苦しいっていか武骨ってイメージが大きかった。

その後お互い頑張ろうって励ましてくれてさ、たったこれだけのやり取りで受験って事で緊張してたんだけどいつの間にか和らいでたの！

それでこれも何かの縁って事で連絡先を交換して友達になったんだよね。この後何回かやり取りして分かったんだけどカルカルって表情にこそ出ないけど結構感情豊かだまに冗談とか言うてくれるんだ。そのギャップで余計に可笑しくて沢山笑っちゃった！

カルカルから雄英に合格したって聞かされた時とっても嬉しかった！自分の事でも無いのにガッツポーズするぐらいには喜んじやった。それでアタシも合格した事、A組に入る事を伝えたらカルカルもA組だって伝えられてまた喜んじやった。アハハちよつと顔、熱いや。

カルカルって渾名を付けたのはその後すぐで、カルカルは初めて渾名を付けてもらったんだって。喜んでくれたみたいでアタシもニマニマしてたと思う。

それでさ、アタシ気付いたんだ。カルカルと一緒にいると何だか安心できるのはカルカルが温かい人だからだ。最初は分かんないけどさ何回も話すとお日様みたいに温かく優しく包んでくれる、そんな雰囲気はカルカルは纏ってたんだ。カルカルってば結構ズバズバ言う人だから初対面の人はちよつと勘違いする事もありそうだけだね。

雄英入学前日までお互いに連絡しあってそしたらカルカル一人暮らしするって聞かされたんだ。家事できるのって聞いたなら「一時期年上の知り合いの身の回りの世話をしていたから平均以上は出来るだろう。」って返された。どう反応したらいいか分からなかったからその場はスルーしちゃったけど今思えばカルカルって人のお世話出来るぐらいには女子力高いのかな？

入学日に校門前でカルカルを見つけた時は手を振って駆けよっちゃった。だって細身で長身で白髪だから直ぐに分かったもん！

入学式が楽しみだねって話してたら普通じゃない事が起こりそうだって言うんだ。予知系の個性なのって聞いたら違うらしいけどカルカルの勘は良く当たるみたい。でもカルカルの勘だと妙な納得感が出てくるんだよね。こういう所がカルカルの只者じゃない感の正体なのかもね。

教室に入るとTHE・真面目って感じのメガネ君、飯田に自己紹介と席を教えてもらった。カルカルとは席が結構離れてるのが残念だったなく、まあ休憩時間とかお喋りしに行けばいいよね。その時葡萄みたいな頭の背の低い男子がカルカル見て血涙流してた、なんで？

取り敢えず席の近くの人達に自己紹介して席に着いたあとどうしようかって考えてたら飯田と緑髪の子とほんわかした子の会話にカルカルが混じりに行った。どうやら実技試験の会場が一緒だったみたいでカルカルは緑髪こと緑谷とほんわかした子、麗日ちゃんを助けたらしい。カルカルは優しいからしてもおかしくないなって思った。でもそれと同時に「いいな」って考えちゃった。なんでだろう？

でもさっきの疑問はそのあと直ぐにふっ飛んじやった。だって学校に髪ボサボサで草臥れてて寝袋に入った人がいたんだよ！しかも



カルカル以外は気付いてなかったんだもん。

その後担任の相澤先生って分かったんだけど気配を完全に消してた人を最初から見つけてたってカルカル本当に何者？

相澤先生に体操服着てグラウンドに出ろって言われて行ったら個性把握テストをするって言われた。入学式とかが無いのはちよつと不満だけど面白そうだなって思った。今思えばアタシの面白そう発言が先生を怒らせちゃったのかな…。

それで手始めに実技試験1位がすることになったんだけど、まさかのカルカルが1位だった。あとカルカルを凄い形相で睨んでたガラの悪そうな奴がいた。カルカル個性なしでソフトボール投げ200メートル越えはおかしいと思う。え？相澤先生、摩覇羽羅中学なら納得できるの？摩覇羽羅中学恐るべし。でも驚くのはここからだった、カルカルが突然燃え上がったと思ったら次の瞬間には服装が変わってたから。肌に張り付くような黒い布？に金ぴかに輝く鎧を着てた。これがカルカルの個性って思ったけど良く分からなかった。だって炎を操って鎧を着てるんだよ？益々訳が分からなかった。炎を使う個性って言えば有名処だとエンデヴァーだけどソレとはまた違う感じだし。

その後カルカルが叩きだした記録で更に皆度肝を抜いた。肘から炎を噴出しながらボールを投擲すると爆風出しながらボールは進んで行った。記録でいえば3000メートル越え。その後は麗日ちゃん記録∞以外誰も勝てなかった。

カルカルは全部の種目で驚異的な記録を出していった。途中只者じゃないって言ったけどここまで自分達との間に格差があるとは思わなかった。だからこそカルカルが総合1位になっても驚きはしなかった。それどころか殆どが悔しさを滲ませてたけどそれ以上にカルカルをキラキラした目で見ていた。うん、カルカルは凄いや！。

全部終わった後カルカルは緑谷と話したい事があるから保健室まで見送るって言ってた。アタシ達はアタシ達でカルカルの実力を知って反省会をしようって事になった。爆発してた奴は下らないって直ぐに帰っちゃったけど。とにかく今日はここ最近で一番ドタバ

夕した日だった。

## 戦闘訓練

個性把握テストが終わり指を怪我した緑谷出久に話したい事がある為カルナは付き添った。

「あの、陽神君？話したい事って？」

「緑谷、お前の個性についてだ。あの時実技入試の時から感じていた、お前の個性は酷くお前自身に適合していない。まるで突然体に宿ったかのようだ。」

「!?」(そんな、もしかしてバレた!?いやまさか陽神君の前で個性を使ったのは今日も入れてたった2回!確かに違和感を覚えられる事はあってもこんなアツサリ…!)

「個性とはあくまでも身体機能の一部、確かに生まれながらに強力な個性を持つ者はいらるだろう。しかし個性そのものの強力性と出力は別だ。いくら強力な個性であろうとも鍛えなければ宝の持ち腐れだ。」

「俺の個性とて同じだ、最初からあれ程の出力があった訳ではない。個性が目覚めた時期から個性と肉体両方を鍛えたからこそ今の俺がある。」

「お前の個性は一見して増強系に見えるがあそこまでの出力が出せるのにも関わらずお前の体はそれと比例するように損傷している。緑谷お前の個性は本当にお前のモノなのか？」

「ひ、陽神君!僕が個性を使うと何であそまで傷つくのかは言えない…!でもこの個性は最近発現したんだよ!だから…その、あの。」(本当の事は言えない、でも嘘も言えない。これで誤魔化せれるかな?)

「嘘は言っていないようだな。緑谷、俺は別にお前を攻め立てたい訳では無い。」

「えっ…」

「何を不思議そうな顔をしている?単純な話、折角出来た友人を心配するのが不思議か?完全治癒の個性でも持っていない限り激しい肉体の損傷はいつか完治しなくなるだろうと思っただけだ。このままでは

お前はまともに腕を振る事すらままならなくなるかもしれないぞ。」

(そうか、陽神君は僕の事を心配してくれて、友達だつて言ってくれて。それなのに…僕は。)

「それにお前はヒーローに対して並々ならぬ熱意を持っていると見える。そんなお前が腕で一度攻撃しただけで周りの助けが必要になる役立たずに成る事はとても憚られる事なのではないか?」

「ありがとう…陽神君。こんな僕の事を心配してくれて。だからさっきの事だけどさ、やっぱり言えない。でも、それでも僕の事を友達だつて思ってくれる?」

「愚問だな、誰しも言えぬ秘密の一つや二つはあるものだ。その程度の事で見放す程俺は狭量ではない。あらためて緑谷、俺の事はカルナで良い。」

「うん! だつたら僕の事も出久つて呼んでよ! あつ保健室つてここだね。送ってくれてありがと、カルナ君!」

「構わない、ではまた後でな出久。俺は一足先に教室に戻っている。」

所変わって1—Aの教室、カルナと緑谷を除く全員が戻っておりその内2名は既に下校し、他の者達は今日の反省会をしている。

「あーあ、爆豪の奴下らねえとか言つて帰つちまったなく。轟は轟で自分の反省点は自分で分かつてるとか言つて同じように帰つちまうし。」

「まあそう言うなつて上鳴! あいつらは少しとつつきずらいけど悪いやつじゃなさそうだしよ!」

「そうは言うがよく切島。つとそろそろ陽神の方は帰つてくんじゃね?」

「10分は経つし確かにそろそろ、つと噂をすればつてやつだな。おー陽神お帰り!」

「ああ今戻つた、緑谷もその内戻つてくるだろう。…それにしてもお前達は何をしていたんだ?」

「反省会やつてんだよ。切島がやろうつて言い始めてさ。あつ俺上鳴電気! よろしくな陽神。」

「陽神カルナだ。それにしても2名ほど見当たらないが？」

「爆豪と轟だな、あいつら両方とも帰っちゃった。」

（なるほどな、それにしても反省会か。自分達の良かった点、悪かった点を客観的に見ているのか。やはり雄英<sup>こへい</sup>来る者達は皆向上心が高いようだな。）

カルナは気付いていないがこのメンバーが反省会をしようと思っただのはハッキリと垣間見たカルナとの差が原因だという事を。

その後緑谷が指の怪我を治療され戻って来たのを区切りとして反省会はお開きになった。

結果としては皆殆ど自身の個性に対する理解度が足りていなかったという事だった。常日頃から展開されている異形ならばまだしも、未だにそこまで使ったことが無い又は個性の応用力が足りなかったと結論付けたのだ。

クラスメイト達はその後は普通に帰る者、せっかく出来た友人と仲を深める為に寄り道しようという者と様々だ。

カルナは三奈や緑谷達と一緒に帰ろうと誘われた為共に下校している。メンバーはカルナ、三奈、緑谷、麗日、飯田だ。

「それにしてもさくカルカルとカルカルの個性があんなに凄いなんてビックリしたよね。」

「確かにそうだな。ぼ、俺も足の速さには自信があったのだがあそこまで差を付けられると寧ろ清々しかったぞ。」

「俺自身己の実力に対して確かな自信を誇っているが結局は自己理解と鍛錬だ。今の自分に満足出来ぬのならば日々の鍛錬しかあるまい。」

最初は初対面に近いような者も居たため会話は少々硬く特に女子に対して免疫を持たない緑谷は顕著だった。しかしそこは元氣滲刺な三奈と麗かな雰囲気醸し出す麗日、そして時折ぶっこまれる真面目な顔したカルナの天然発言ですぐに打ち解けられた。

「ちよつと気になってたんだけどさ、芦戸さんは陽神君と前から友達だったの？ほら今朝からずっと陽神君の事”カルカル”って呼んで

たでしょ?」

「俺と三奈が知り合ったのは雄英受験の時だ、お互い肩がぶつかってしまつてな。その時に何かの縁だと思ひ連絡先を交換して友人になつた。」

「そうなんだ!それにさ、カルカルつて初見の人が見てもカルカルつて感じしないでしょ?カルカル、結構勘違いされそうなんだから少しはギャップが出ていいかなつて思つてさ。」

「そうなんやー、確かに陽神君はカルカルつて感じせんからギャップあるな。」

そんなほのぼのした会話をしながらカルナ達は各々帰路についた。

因みにカルナ女性陣に語られた自身のイメージについて少しシヨックを受けていた。

国内トップクラスのヒーロー育成機関である雄英高校だが実際はヒーロー科目が無い午前中は必修科目である通常の授業が執り行われる。

「はい、じゃあこの例文の中で間違っているのは?」

((普通だ...)) (クソつまんねっ。)

その授業担当はそれぞれ雄英教師のプロヒーロー達に割り振られているのだがヒーロー科目と比べると如何せん普通なのだ。

偏差値79という学校ではあるが、それを突破して入学して来た者達にとっては普通すぎて物足りない、退屈だと感じる生徒はいるのだ。有名プロヒーローとはいえどやはり授業自体は通常通りなのである。因みに現在は英語で担当教師はプレゼント・マイクである。

(授業は滞りなく進み、こうして昼食を食べている訳だが...美味しいな。出久がテンションを上げて語っていたがクックヒーロー・ランチラツシュだったか。好物のカレーライスを注文したがファミレスで出てくるような物とは比べ物にならないな。毎日通っていたら舌が肥えてしまいそうだ。)

カルナは緑谷、麗日、飯田と共に学食へと昼食に来ていた。三奈も

誘ったのだが新しく出来た友人と共に食べる約束していた為今日は別だ。

ランチラツシユが運営するこの食堂は料理は絶品かつ安価という事で直ぐに混雑してしまった。

「ふう、とても美味だった。毎日通いたいものだが一人暮らしの身としては自炊も考慮しなければいけないな。」

「カルナ君は一人暮らしだったのか？親元を離れ自ら自立を促すとはとても素晴らしい事だとぼ、俺は思うぞ！」

「一人暮らしは何も俺だけでは無いだろう。俺は自宅からでは難しいからそうしているだけだ。」

「でも僕も凄いと思うよ。掃除とか他の家事も全部やらなくちやいけないってのは少し難しいと僕は思うな。」

この様に和気あいあいと会話を楽しんでいる。また、カルナから名前前で呼んでくれと言われた為麗日と飯田はそう呼ぶことにした。

こうして午後のヒーロー科目の為に英気を養っていたのである。

「わーたーしーがー、普通にドアから来た!!」

筋骨隆々な男性、皆さんご存じオールマイトが今回の授業の担当だ。No.1ヒーローを目の前にしてクラス全員が程度の差はあれど目を輝かせている。

それはカルナであっても例外ではなかった。

(強いな、これまでは画面の中の存在が今こうして我々の前にいる。荘厳かつ優し気な気を感じるな。)

「本当にオールマイトだ!!本当に教師やってるんだあ！」

「生で見るとやっぱり画風が違うなあ、凄すぎて鳥肌が。」

「ケロツ、あれは銀時代のコスチュームね！」

憧れの存在を前にすればいくら優秀な生徒と言っても年相応な反応をする。

「私が執り行うのはヒーロー基礎学。ヒーローに成る為の素地を作るための様々な訓練を行う科目だ。単位数が最も多いから注意してくださいぞ！」

「本日のヒーロー基礎学はコレ、戦闘訓練だ！そしてソイツに伴ってえこちら！」

そう言つて“BATTLER”と書かれたプレートを取り出し壁を指差すオールマイト。そうすると壁が出っ張り中からケースが表れた。

「入学前に送ってもらつた要望と個性届に逃えて作られたコスチューム！着替えたら順次グラウンドβに集まるんだ！」

『はい！』

コスチュームとは単なる見た目装備では無くその個性の持ち主と最も適した機能や装備を持つている。その為オーダーメイドである為個人によってその見た目や性能は大きく異なる。

「わあく！カルカルのコスチュームってスーツなんだね、似合ってるよ！」

「ありがとう三奈、他の者達にも言えるが良く似合っている。」

「確かに、芦戸の言う通り似合ってるぜカルナ！でもよスーツって動きにくくねえのか？」

「その心配は無いぞ、鋭児郎。存外に軽く頑丈で動きやすい。そも俺の個性では戦闘時には自動的にあの鎧姿に変わる為コスチュームというものはあまり意味を為さない。」

そう、カルナはどんな服装であろうとも個性使用时には炎に包まれあの黄金の鎧を纏うので某知人に頼んでコスチュームを考えてもらつたのだ。

ある種あの姿こそがカルナに最も適したコスチュームと言える。因みにコスチュームのスーツはメタ的に言うとな英霊正装・カルナの赤いコート無しVer.である。

「鋭児郎のコスチュームは個性の関係もあるのだろうが良く似合っているぞ。お前が良く言っている男らしい装備なのだろう。」

「へへ、サンキュー！面と向かって言われると少し照れるな！」

「だよね！だよね！カルカルってこういう事真顔で言うんだもん！」

雑談しながら向かって行くとオールマイトに指示されたグラウンドβに着いたようだ。オールマイトは仁王立ちしながら生徒達を待



ち構えていた。

「恰好から入るってのも大事な事だぜ少年少女！ 自覚するんだ、今日から自分がヒーローなんだと！」

「良いじゃないか皆！ かつこいいぜ！ それじゃあ始めようか有精卵ども！」

その後のオールマイトの話を要約するとくじ引きでそれぞれペアを作り最終的にヒーロー組と敵組に分かれて屋内戦を行うという事だ。

設定では敵がアジトの何処かへ核兵器を所隠しており、ヒーローはそれを処理しようとしているという何ともアメリカンである。

ヒーロー組の勝利条件は敵組を全員確保するか核兵器にタッチ、敵組の勝利条件はヒーロー組の全員確保か制限時間までに核兵器を守り切ることだ。

途中生徒達に質問責めされた為オールマイトはカンペを取り出し解説した。いくらNo.1ヒーローといえど新米教師である為仕方の無い事なのだ。

どうやらヒーロー組はヒーローの基礎を、敵組は敵の心理を学ぶうだ。

くじの結果は次の通りである。

- A. 緑谷&麗日
- B. 障子&轟
- C. 峰田&八百万
- D. 爆豪&飯田
- E. 芦戸&陽神
- F. 口田&砂藤
- G. 上鳴&耳郎
- H. 常闇&蛙吹
- I. 尾白&葉隠
- J. 瀬呂&切島

次に対戦くじを引くと最初はAチームvsDチームだ。他ノメン

バーはモニタールームでその内容を観戦する事になった。

(いきなり奇襲か爆豪、それもまた戦いの作法ではあるが。出久と爆豪は幼馴染だと聞いたが関係自体は良いものでは無いようだな。)

(先ずお互いに戦いへの心意気からして既に違う。出久は恐れながらも立ち向かう勇気を示しているが、爆豪はおそらく一方的な蹂躪劇を想定していたのか動きが単調で私怨見え見えだ。出久が簡単に対処し投げ飛ばされたのもこれが原因か。いや、それだけでは無いな。幼馴染、これまでずっと爆豪のやり口を見続けて来たからこそ見切れた…か。)

(飯田の方はメット被っているためよく分からんがああ奇妙な動きとふんぞり返り、麗日の唇の動きから真面目に悪に成りきっているという事か。このままいけばおそろく…。)

「カルナさん、先ほどからずっと口を噤んでおりますが如何かなされたのですか?」

「単純にAとD両方の唇の動きを読んで内容を確認していた。」  
『?!』

何でもない事のように答えるカルナにその場の全員が驚く。

「凄いなカルカルそんなこと出来るんだ!」

「陽神少年、君は読唇術が使えるのかい?」

「日本語ならば可能だ、出久と爆豪は言わずもがな飯田は自分なりに真面目に敵に成りきっている。」

その言葉に何とも「飯田らしい。」と全員が納得する。真面目が服を着て歩いているような男だ、真面目に悪ぶっているという状況を思い浮かべて苦笑する。

しかし、その間に状況は急転した。

爆豪の個性は手のひらから爆発性の物質を分泌させそれを爆破させるというものだ。爆豪が付けている籠手はその物質を溜める事が出来ピンを引き抜く事でそれらを一気に爆破できるのだ。爆豪はそれを態と出久にギリギリ当たらないように撃ちその威力を見せつけたのだ。

「相当頭に来ているようだな。何が原因かは知らないがあれほどまで

の妄執を抱えておきながら狙いを態と外すとは見事な芸当だ。」

「おいおい、何冷静に解説してんだよ。あんなモン何度もやってたら緑谷死んじまうよー!」

「上鳴の言う通りだぜ先生、爆豪の奴止めねえと緑谷が危ねえ!」

「むう、いやしかし。」

上鳴と切島の言う事は最もだがオールマイトは決めあぐねていた。なぜなら、

「その心配は無いだろう鋭児郎、上鳴。爆豪は怒りと私怨に取りつかれているが部分部分で冷静だ。奴がしたいことは緑谷の殺害では無く己が実力を見せつける蹂躞劇だ。つまり一見して怒り狂っているが態と攻撃を外すなど妙にみみっちい。」

?みみっちい!?!

「うむ陽神少年の言う通りだろう、しかしアレは何度も撃たせる訳に行かないな。」

という事でカルナによって爆豪の真意をバラされオールマイトによってあの大爆発はもう一度行えば失格になると言い渡された。

再度キレたが今度は「殴り合いだ!」と向かって攻撃するが最初と違い爆豪はトリツキーな動きで出久を翻弄した。

「そんなタイプには見えねえが以外と繊細だな。」

「えっ?」「どういう事だ?」

「目くらましを兼ねた爆破で軌道変更、そして即座にもう一回。」

「左右の爆破力を微調整しながら行っていますわね。」

「才能マンかよ、やだやだ。」

「単なる才能だけでは無いだろう、やって出来た事ではあるのだろうが並々ならぬ努力が伺える。」

爆豪と緑谷の戦いは白熱するかに思われたが勝敗はあっさり決まった。緑谷が麗日と取った連携によって核兵器を回収したからだ。

勝ちこそヒーロー組だが緑谷の取った行動は核兵器回収という設定で行くならとても褒められたものでは無い。故に飯田が今回の MVP となった。緑谷は言わずもがな、麗日は随所に見られた気の緩み。爆豪は私怨丸出しのデタラメな爆破による建物損害、よって最も

核兵器を守っている敵に成りきれていた飯田がMVPであると八百万に回答された。

全部言われた事にオールマイトは少ししよぼくれた。

続く第2試合はB v S Iだったが轟のビル全体を凍らせるという力業で難なく終わった。モニター室まで冷気がやってきた為カルナが炎を出して皆に暖を取らせていた。

第3試合はG v S J、第4試合はG v S Cと進んだ。

そして第5試合E v S Fだ。最後となった試合、個性把握テストで規格外な記録を出し続けたカルナの試合ということで注目があつまる。

「ここまでの試合皆凄かったよね、ヒーロー組も敵組もさ。」

「ああ、皆素晴らしい試合だった。だからこそ俺達も彼らに見せれる戦いをしよう。では、行くぞ三奈。」

炎に包まれ鎧姿にカルナはなった。前と違ったのは鎧と同じく黄金に輝く槍を持っていた事だろう。その事について三奈が聞くとカルナはこの槍も含めて自分の個性なのだと語った。

「三奈、はつきり言って今回の戦いの要はお前だ。俺の個性は真髓を發揮しようものなら辺り一面を吹き飛ばす事になる。」

「マジで!?!でも、うん!任せてよ、そういう事ならアタシ頑張るからさ!」

「ああ囧と援護は任せてくれ。」

「まさか核の前で二人して待ち伏せだったとはな砂藤、口田。」

「!?!」オロオロ

「陽神相手じゃ小細工したって無駄だと思ったからな。芦戸はどうしたんだよ?」

「俺の個性では巻き込みかねんから1階で待機してもらった。それにしても俺の実力を評価しておきながら真正面から来ようとはな、その心意気に敬意を示す。」

「そう言って貰えるのはうれしいぜ。口田守りは任せたぞ!俺は陽神

を相手にするからよ！」

「！！」コクコク

口田が核の前で震えながらではあるが守り、砂藤は個性「シュガードープ」を使って攻撃を仕掛けた。砂糖を摂取する事で力を数倍に高める個性でありカルナが槍で防ぐ度に轟音が鳴り響く。

その光景に口田は安心し、砂藤は更にラツシユを続ける。カルナは防戦一方だ。その光景をモニター室で見守るクラスメイトが疑問に思う。

「カルナって近接が苦手なのか？その割には槍持つてるんだけどな。」

「そうですね、先ほどから砂藤さんからの攻撃に防戦一方ですし。個性把握テストの時は炎を使っていましたし、炎あつてのあの強さなのでは？」

「核があるからあんな馬鹿でかい炎を使えないって事か。ん？なら何で2人で攻めに行かなかったんだ？芦戸も結構身体能力は高かったんだぜ？」

「だよな、だって芦戸さつきから 扉の外で待機してるもんな。」

カルナが防戦一方になってから数分が経過した。当事者である砂藤は違和感を感じていた。確かに構図としてはカルナの防戦一方、しかしカルナは全て何食わぬ顔で受け止め躲し受け流す。

そして遂に砂藤に変調が来た。急激な倦怠感や眠気、これこそが「シュガードープ」のデメリット。早々に決めなくてはと焦り始めた時、

「今だ三奈！」

「まっかせてー！！」

カルナの合図を皮切りに突如芦戸がスケートの様に床を滑りながらドアから現れたのだ。芦戸三奈の個性「酸」体から酸を分泌して対象を溶かす個性。その酸を靴の裏に空いている穴から出して床を滑走したのだ。

そしてこの時漸く砂藤達は嵌められたのだと気づいた。個性を使うと巻き込むからと言っておきながら個性など鎧と槍しか使ってい

なかったのだ。

「ひゃっほーい!!」

そしてカルナの背をジャンプ台代わりに跳び上がり、核を守っていた口田を飛び越えて核にタツチした。

『試合終了！Eチームの勝利！』

「やったねカルカル！」

「ああ、三奈のお蔭で上手くいった。」

「もしかして、ずっと、これを、狙ってた、のか。」ゼハーゼハー

「ああ前もって口田が放つたと思われるネズミ達も炎で追いかけておいたしな。動物は炎をよく怖がる。」

「騙す様な真似をしたがこれも戦いの作法だ。俺も今回の事でこの様な屋内戦は苦手だと再認識出来た、故にお前達も今回の事を教訓にしてほしい。」

「ああ、それは勿論なんだが陽神だけでも勝てたんじゃないか？ずっと涼しい顔で捌いてたしよ。」

「!!」コクコク

疲れ切った顔の砂藤と首が取れそうなほど縦に振る口田にカルナは

「確かに勝てただろうが、これはチーム戦だ。そこで俺単体の力で勝つても何の意味も無いだろう？」

そう何気なく答えるのだった。

## 戦闘訓練後とカルナの個性

カルナ達の戦闘訓練で漸く全員の戦闘訓練は終了し、怪我を負った緑谷を除いたメンバーが揃っていた。その為最後の講評を行おうとしていた。

「それじゃあ最後の講評をしようか！ MVPは誰かな？」

「はい、オールマイト先生。それはカルナさんですわ。最初に口田さんが放ったネズミ達に気付いて追い払い、その後芦戸さんが確実に核を捕えられると確信出来るまで砂藤さんを足止めしてみせましたわ。」

「正解だよ八百万少女！ 陽神少年、君はどうして口田少年が監視役で放ったネズミに気付けたんだい？」

「建物に踏み入った時から視線を感じていたからだ。通常の小動物が持つ警戒では無く明らかな監視の視線を感じていた。砂藤の個性は初日の個性把握テストで糖類摂取による増強系だと知っていたから口田の個性だと判断した。」

カルナがネズミの監視を回避できた絡繰りが視線を感じたからだ」と答えられ、カルナ以外は「カルナなら仕方ない。」と納得してしまっただ。

「ふむ、他に何かある人はいるかな？」

「はい！ 飯田天哉です。俺はカルナ君と芦戸君の連携性だと考えました。単なる単独行動だと欺き敵が隙を晒した瞬間にそこを突くという素晴らしい連携が取れていたと思います！」

「うむ、それも言えるね。これは個人の力量も必要だが飽くまでもチーム戦だからね。逆に敵チームは相手に自身のデメリットがバレていた事を考慮するべきだったね、それはこれからの改善点と言えるだろう。」

「ではこれにて本日の戦闘訓練は終了する！ 私は緑谷少年に講評を聞かせねばならないのでね。着替えて教室にお戻りい!!!」ドタドタ

言いたい事だけ言うと言物凄いスピードで遠ざかっていくオールマイト。

その事に殆どの者達が驚愕やその力強さに興奮していた。ただ走り去るだけでも絵になるのは流石トップヒーローと言えるだろう。

しかしカルナだけは違った。

（気のせいかな？僅かではあったがオールマイトの強力な気が弱くなっていた。先ほどまでであった物が急激に崩れるような感じだったが、いやまさか。）

「なあなあカルナ、聞きてえ事があるんだけどいいか？」

オールマイトに感じた違和感について思考していたカルナに切島が声を掛けた。

取り敢えずその事を思考の隅に追いやり切島の方に向くと全員がカルナに視線を向けていた。

「別に構わないが俺に聞きたい事とは何だ？皆も俺を見ているようだが…。」

「前から気になってたんだけど聞きそびれてたんだよ。カルナお前の個性って何なんだ？ぶつちやけ皆気になってんぜ。」

「切島さんの言う通りです。カルナさんの個性は見てきましたが統一性があまりありませんでした。爆風を伴うほどの炎に芦戸さんの酸を浴びてもびくともしない黄金に輝く鎧と槍とどれもバラバラに感じました。皆目見当もつきませんでしたわ。」

「ねえ陽神ちゃん私蛙吹梅雨って言うの、梅雨ちゃんと呼んで。私ね思った事はつい口にしちゃうの、あなたの個性を教えてくださいかしら。」

そう皆気になってはいたが何となく聞きそびれていたカルナの個性。教師陣は知っていたのだろうが今日まで終ぞ聞けなかった為本人の口から聞こうと思ったのだ。

カルナの個性については一番仲が良い芦戸でさえ知らず、芦戸自身も無意識のうちに「まあいいか。」と気にしていなかった為忘れていたのだ。

「そうか、皆が気になっていたのは俺の個性だったか。別に秘密にしていた訳でも無かったのだが、丁度良い機会だろう。」



気になっていたモヤモヤが晴れると思ひ皆一層カルナに注目した。  
「俺の個性とは【英雄再演・カルナ】古代インド神話、世界三大叙事詩とされる【マハーバーラタ】に登場する“施しの英雄カルナ”の逸話の一端をその身に宿す個性だ。」

「なっ！マハーバーラタの英雄カルナ、ですって!?!」

「そうだ、俺はその英雄カルナの槍の逸話をその身に宿している。」

「ねえカルカル、ヤオモモそのマハー何ちゃらとか英雄カルナって何なの？」

マハーバーラタや英雄カルナが分からなかった為三奈が思わず八百万とカルナに聞いてが無理も無い事だった。現代日本においてもその手の話に通じていなければ先ず知らない事なのだから。

2人によってぎつとマハーバーラタそして英雄カルナについて説明された。序に言えばこの【英雄再演】は実際に存在した・していないに関わらずその英雄の力に目覚めるのだとカルナが解説した。

「それじゃあカルナはその英雄カルナの生まれ変わりみないなものなのかい？」

「そうでは無いぞ尾白。確かに魂レベルで影響を受けているのだろうが飽くまでも俺は俺だ。カルナという名前も両親が英雄カルナが好きだったからという偶然だ。」

そしてこの時この場に居ない緑谷以外は改めてこのカルナという存在がいかに規格外な存在なのか再認識する事になった。

着替えを済ませると切島が個性把握テストの時の様に反省会を提案し今度はカルナと轟も参加する事にしたが爆豪は思い詰めるような表情をしながらも周囲の静止を無視して帰ってしまった。

それと入れ替わるように腕を吊った緑谷が帰ってきたので、爆豪とやり合った事をクラスメイト達に称賛されて照れていた。

しかし爆豪の姿が無い事に気付き既に下校したと教えられ急いで追いかけていってしまった。緑谷は爆豪に追いつくと誰にも言っていない自身の個性の秘密について爆轟に話した。

「何だそりゃあ、借り物だあ？ 訳分かんねえ事ばつか言いやがって、これ以上虚仮にしてどうするつもりだ…！」

「だから何だ！ 今日、俺はテメエに負けた！ そんだけだろが！」

「氷の奴見て敵わねえんじやって思っちまった！ クソオ、ポニーテールの奴の言う事に納得しちまった！ 白髪頭の奴に至っちや英雄の力だとお！ クソ！ クソが！ クソ！ クソ！ クソ！」

「オイ！ お前もだぞデク！ こっからだ！ いいか！ こっから俺は一番になってやる！」

「俺に勝つなんて二度と無えからな！」

（仲直りなどでは無いにしてもお互いに良き方向へは進めたようだな。自尊心の塊のような者は一度打ち砕かれると中々立ち直れなくなるが、あのように立ち上がれるのなら奴はやはり強いのだろう。そして奴に正面から言い放つ出久、お前もまた強き男だな。）

事の成り行きを教室から見守っていた面々は安堵した。そして完全に出遅れてフオローに失敗したオール新人教師マイトの姿があったとか。

## 主人公設定2十@設定

陽神カルナ 追加設定

### ・概要

本作の主人公。両親より偶然にも自身の個性と同じ英雄の名前を授けられた。

両親は飽くまでも普通の人間であり突然変異型の個性【英雄再演・カルナ】を持って生まれた為どちらの個性も有していない。

### ・容姿

表情が硬く、滅多に笑わない為初見の人間からは取っ付き難い印象を受ける。

容姿、声などは完全にFateのカルナであるが全くの別人。個性によって引つ張られた。

顔も声もイケメンだが、それ以上の神秘性を魅せる。しかし同時に鋭い目付きと幽鬼を連想させる色白さを持つ為見る者によっては冷酷な人間に見える。

### ・人物

性格も謙虚かつ義理堅い。極端な話誰かに請われれば相手が極悪人でも無い限り道理さえ通っていれば大抵の事は「それもまたよし。」と了承してしまう。

そのような性格になったのは元々の本人の高潔さもあるのだろうがやはり個性に引つ張られた為。本人も薄々その事に気付いているのだがそれ自体を受け入れている。

個性が発現してから様々な人間に請われれば応えて来たが浅慮なお人好しでは無い。相手の虚偽や隠蔽を見破る能力が個性に含まれている為騙されたことがない。その代わりドツキリなどにも引つかからず、そういう意味での驚きを感じた事が無い。

上記の能力もあつて相手の心や性格を暴き出し、虚偽や欺瞞などで塗り固められた相手が見られたく無いと思う内面さえ看破してしまう事があり誤解される。それと言うのも本人が口下手で言葉を飾る事が苦手な為。それでもつて本当に伝えたい事を相手が分かる様に

言わない事がある為。

オリジナル程では無いにしろ褒めているつもりが相手を逆撫でし嫌悪される事がある。

基本的に目の前で困っていれば見捨てる事は無く常に弱者の味方である。ヒーローに成りたくて雄英高校に入学したが特に誰かに憧れた訳では無い。敬意は持っているが本人が憧れたのはヒーローという誰かでは無くヒーローという行いである。

我欲が薄く、快樂という存在からは凡そ遠い人物だが戦闘訓練などの自分の力がある程度振るえる舞台を好む。

#### 英雄再演 追加設定

・基本的に個性とは身体機能の一部とされているが、この個性はそれのみならず魂レベルで影響を与えている物である。

個性発現前ですら微々たるものだが影響を与えてしまい発現後なら尚更である。自我が塗り潰されたりするのでは無く人格面に影響を与えているだけなので英雄と同じ力を扱えるだけ全くの別人。

・ステータス風に数値化するならば全体的に1ランクダウンまたはマイナスになっている。宝具やスキルは基本的にランクの変動は無い。

・弱点らしい弱点を挙げるならその個性の元ネタとなる英雄の死因が一番の弱点に成りえるということ。

## 学級委員決めと雄英高校校長

様々な経緯のあった戦闘訓練の翌朝、カルナは学校へと登校して来たのだが校門前で立ち往生していた。その理由というのが

「その君！オールマイトが雄英の教師に就任したようですが、授業はどのような感じですか!？」

「やはりNo.1ヒーローの授業というのは他の教師と一味違うものなのですか!？」

「オールマイトが受け持つ授業の名前をお答えください!？」  
「…。」

という感じの取材陣の所為だった。

まだ入学してから数日しか経っていないが故にこの様な事態は想定していなかったカルナ。それ故に上手く答えられず思わず固まってしまったがこのままでは中に入れない為早々に突破する事にした。

「俺が貴様らに答える義理は無い。この様な時間帯から俺達学生の邪魔をしようとはな、成程随分とご苦労な事だ。疾く退けるが良い、此処は我々が道だ。」

(申し訳ありませんが私は入学して数日しか経っておらず授業も一度しか受けていない為答える事が出来ません。朝から大変なお仕事だと思いますが、私達学生は未だ登校時間な為貴方達が此処に留まっていると遅刻する生徒が出るかもしれません。無理を承知でお願いしますが今はどうか私達に道を譲っていただけると幸いです。)

『ッ!?!』

本人は丁寧に行ったつもりだが相手にはかなり威圧的に聞こえるように言いたい事を伝えたカルナ。取材陣はカルナのあまりの物言いに憤慨するどころか驚愕し、そのまま道を譲り渡した。

漸く校内に入れたが時間は遅刻という程では無いにしろいつもより時間が押している為急ぎ足で教室に行く。

教室に着くと未だ朝だというのに疲れ切った顔の者が何名か居た。おそらく先ほどの取材陣の所為だろう。

「おはよくカルカル、校門前に記者の人達居たでしょ？朝から嫌になるよね。」

「おはよう三奈、俺も先程捕まったよ。」

「でしよう？通してつて言っても中々通してくれなくてさあ。」

「？いや、俺が先ほど通してくれと言ったら快く通してくれたぞ。俺の後続の生徒達にも道を譲っていた。」

「あれ〜？そんなに聞き分け良かったかなあ。」

と何でもない会話を担任である相澤が来るまで行った。

カルナと三奈が話していると相澤教諭が教室に着いたため切り上げる。

どうやら昨日の戦闘訓練のVTRを見たらしく、最も問題が多かった爆豪と出久に注意をしていた。

そして話を切り替える様に咳払いをした。

「急で悪いが今日は君達に学級委員を決めてもらう。」

？学校つばいの来た〜？

ここに来て久方振りの学校つばい行事にクラス全員の心が一致した瞬間である。

初日が個性把握テスト、次の日が戦闘訓練とヒーロー科である為是非も無いと言えるが漸く普通つばい行事が来たのだから。

ふむ、しかし学級委員か。興味はある、普通の学校なら忌避される事の多い役職であるがヒーロー科ならば皆別という事なのだろう。

切島を始めとして三奈や他のクラスメイト達も立候補している。

：しかし峰田よ、女子のスカート丈が膝上30cmとはどういうことだ？いや理解したくは無いが。

かく言う俺も立候補したのだが、飯田の言い分である多数決と相澤教諭の許可で多数決に決まった。飯田、皆が言うようにその聳え立っている腕はお前も成りたいという事なのだな。

結果で言えば出久が4票で委員長に、八百万が2票で副委員長に決まった。俺自身は0票だ、自分に投票しようとも思ったが多少人見知

りである出久の為になるかと考え出久へ投票した。また、よく物事を考える出久には似合っていると感じたのもあるのだがな。他に候補としては飯田等が居たが今回は出久に入れさせてもらった。

時は少し進んで昼時、俺と三奈は食堂でランチラッシユの作る昼食を食べている。ひよこ豆カレーも中々美味だな、明日はカツカレーを注文してみるか。

「あーあ、学級委員長やりたかったなー。緑君に決まったのは意外だったけどやる時はやってくれそうつてのはあるよね。」

「ああ、出久は普段は少々頼りないがここぞという時は普段以上の力を示すだろう。後はあの人見知りな所が直って欲しいのあったが俺は出久に投票した…ッ。」

「そういえばカルカルつてば0票だt『Grirrirririri!!!』な、何これ警報!？」

談話していると突如警報が鳴り響く。

周囲の先達方の話を聞くに校舎内に外部の何者かが侵入してきたという事らしい。そして先程感じた邪悪な気配、良くない事が起こっているようだ。

しかし今はこのパニックを起こした人の波だ、出入口に近かった事もあり既に吞まれかけていた。

「痛ッ！ちよつ、引つ張らないで！」

「三奈こつちだ。」グイッ

今カルナが行った事を説明すると人波に完全に吞み込まれそうになった芦戸の手を咄嗟に引つ張り、壁に押しやり両腕を芦戸の両側の壁に押し当て自らの体で盾を作るという俗に言う壁ドンというやつである。

その結果起こった事はある程度カルナに対して好意的な女子に対してカルナが壁ドンをしているという構図である。

「へ？え、ちよ！カカカ、カルカル!？」

「少し我慢してくれ、今見ての通り飯田が沈静化を図っている。それにしても侵入して来たのはマスコミ連中だったようだぞ。」

芦戸からしたらそれどころでは無いのだがカルナは壁ドンをしな  
がら冷静に状況を解説した。

麗日・飯田が連携してこの人波を鎮静してくれた為漸くカルナは芦  
戸から離れた訳なのだが

「ふむ、落ち着いたようだな。む、どうした三奈？酷く動揺し顔が赤い  
ようだが体調が悪いのなら保健室に連れて行こうか？」

「な、何でもない！何でもないよ！カルカル！アハハハハハ！」

「そうなのか、もし体調が悪ければ遠慮無く言うがいい。」

ここまでの事を全て何気なくやっているのだから天然とは恐ろし  
いものである。

その後を端折って語るとマスコミ達は警察の到着と共に追い返さ  
れた。

また、食堂での飯田の活躍が見込まれ出久の鶴の一声によって新た  
に飯田が学級委員長に任命された。八百万は終始悔しそうな立つ瀬  
無さそうな表情をしていたが是非も無し。

俺達は昨日のマスコミ雄英侵入事件から明けた今日、相澤教諭から  
本日のヒーロー基礎学について説明を受けていた。

今回はオールマイト教諭に加えて相澤教諭ともう一人の三人態勢  
で行うようだ。

色々と聞きたい事はあったが話されないという事は未だ言うべき  
では無い又は言う程の事では無いということなのか。

「今日のヒーロー基礎学のテーマはコレ”RESCUE”<sup>人命救助</sup>だ。」

「これこそヒーローの本質だあ！腕が鳴るぜ！」

「水難なら私の独壇場ケロケロ。」

「おい、まだ途中だぞ。」ジロ

この相澤教諭の眼力は得も言われぬ圧力があるがコレがプロヒー  
ローの持つ威圧なのだろうか。

ただ一睨みするだけで教室全体を黙らせるのだから凄まじいな、俺  
もやろうと思えば出来るかもしれないがアレは物理的な破壊力で周



困を黙らせるものだしな。

「今回コスチュームの着用は各自の判断に任せる。場合によっては動きを阻害する場合もあるから注意するように。訓練場は少し離れた所にあるからバスで移動する。」

「それと陽神、校長がお呼びだ。遅れてもいいから終わってからこっちに來い、話は以上だ。各自行動開始。」

まさか俺が呼ばれるとは、何も問題など起こしていないはずだが。

いや、目を付けられるとするならば俺の個性「英雄再演・カルナ」性…か。

クラスメイト達には一言二言交わし遅れると言って校長室に向かう。

…?  
此処が校長室か、扉の向こうから人とは違う気配を感じるがこれは

た。  
ノックを行うと「どうぞ入って欲しいのさ。」と言われたので入った。

「初めましてなのさ、私は根津。ここ雄英高校の校長さ、よろしくしてほしいのさ。」

「お初にお目にかかる、陽神カルナと言う。こちらからもどうぞよろしく頼む。」

表情にこそ出さなかったがこうして会う事で違和感の正体が漸く理解出来た。

俺達が通う雄英の校長は二足歩行で立ち喋るネズミの様な犬の様な小動物だったのだ。

## USSJ：不穏な嚙矢 前編

個性というものについて改めて振り返ってみよう。個性とは超常的な力を秘めた身体機能の一部だ、故に使い続ける事で鍛える事が可能だ。

つまり個性とは現代において誰にでも発現しうる可能性を秘めている訳だ。そして個性は人間以外にも発現する事があるのだ。可能性としてはとても稀な事ではあるが動物に発現した事例がある。

俺が何を言いたいのかと言うと俺の目の前に立つこの小動物はその極めて稀な事例の一つであり自己紹介してきた様に現雄英高校校長という事らしい。

俺はこれまでの日課としている鍛錬や長期休暇を利用した修行によつて多種多様な個性所持者と出会つて来たが、個性を獲得した動物には出会つた事は無い為不躰ではあるがまじまじと見てしまつていく訳だ。

俺の【英雄再演】もかなりのレアケースだという自覚はあるのだがそれとは別方向でレアケースが居る事がそれをより促してしまつた。「こうして見られる事には慣れていくけれどこんなに見つめられると少し照れ臭いのさ。」

「っ、申し訳ない。不躰な視線を送つてしまつた事を謝罪する、根津校長。」

「別に気にしてないのさ。さて陽神カルナ君、今日君を呼んだのはいくつか話したい事があるからなのさ。」

「了解した、出来ることならヒーロー基礎学が終わる前に終了して欲しい。ヒーローに成る為の基礎を学べる貴重な授業だ1秒でさえ惜しい。」

「そうだね、君のその気持ちは良く分かつたのさ。なら早速始めるとするのさ。陽神カルナ君、君は自分の個性についてどの程度理解しているのかな?」

俺自身の個性への理解、か。

成程な、確かに俺の英雄再演とは俺そのものに関わらず爆弾の様な物だと言える。

英雄再演とは未だに謎を秘めた個性の一つであり歴史に名を遺した英雄・偉人の力がある程度限定的ながらも発現させた個性だ。結局のところ俺自身はどうやって英雄カルナの力を扱えるだけの偽者でしか無いのだろう。しかし問題は【英雄再演・カルナ】だ。

唯でさえ英雄・偉人という強力な力だ、そして英雄カルナとは規模・世界観が強大なインド神話の武人なのだ。先ほど爆弾という表現を使ったが正しく力を制御出来なければ辺り一面を焼き滅ぼす爆弾そのものなのだから。

だからこそ根津校長の言わんとする事は理解しているつもりだ。

「全て、とは言えないが力を十全に扱い制御出来る程度には理解しているつもりだ。少なくとも周囲の人間を無差別に巻き込む様な使い方ではない。」

「ふむ成程ね、それを聞いて安心したよ。君の資料を見てね英雄カルナの【英雄再演】ならば君は個性によつて人格にも影響を受けている筈なのさ。だから君のその言が嘘では無いと信用するのさ。」

「そう言っていただけとありがたい。これからも俺の個性の原点となっている俺が憧れた英雄と同じ名に恥じないように精進する事を誓おう。」

「そこまで大それた言い方をしなくても構わないのさ。ここには君と私しか居ないのだからもう少し肩の力を抜いても構わないのさ。」

俺は…、つくづく恵まれているようだ。個性的ながらも親切に接してくれる友人達、厳しいながらも的確なアドバイスと優しさを見せる担任、誰もだ憧れるNo.1ヒーローやその他のヒーローが勤めている教師達。

そして俺達生徒達を一人一人大切に思ってくれているこの学校のトップ。ここまで親切に接してもらえると恵まれているとしか思えないな。

「もう一つ聞きたいのさ、先ほど個性の制御と言っていたけど如何やって成し遂げたのさ？ 実力テストを見ていたから君の力の強さも

制御もある程度は分かっているのだけど個性が発現し始めた時代から数えても【英雄再演】は片手で数えられるのさ。だからこそ謎とされる個性であるが故に君がどのように制御できるようになったのか聞きたいのさ。」

「端的に答えるならば日課である肉体面の鍛錬、長期休暇を利用した個性の修行そして…祈りだ。」

「鍛錬や修行は分かるのさ、けれど祈り？」

一瞬根津校長が訝し気な表情をしたが先の3つは今の俺には無くてはならないものだ。特に3つ目の祈りは個性が発現してから自然と行うようになった事だ、強制される訳では無くあくまでもやるやらないは俺の自由であり今日まで殆ど欠かさず続けている。

「そうだ、鍛錬は個性を十全に扱える肉体を作る為だ。修行は広い私有地を貸してもらい行っている、これは個性をより理解・強化を目的としているな。そして最後の祈りだが、これは太陽神スーリヤへ捧げている。」

「太陽神スーリヤ、理解したのさ。でもそれは必要なことなのかな？」  
「殆どルーティーンに近いがな、午後の沐浴こそ休日以外出来ない故に簡易的に済ませている。その日の安全と天より俺達の見守り晴れた日には温かく照らして頂いてくれる事への感謝を捧げている。」

俺が言い終えると根津校長が考え込むように黙想し、数秒すると納得したような笑顔を見せてくれた。どうやら俺の言った事を受け入れてくれたようだ。

「今日は時間を取ってしまつてすまなかつたのさ。削られてしまった基礎学の単位はしつかり付くから安心してほしいのさ。」

「感謝する。話が以上なら俺は訓練場の方に行かせてもらつても構わないだろうか。」

「勿論なのさ、今車を出してもらおうから待つt『Prrrrrrr!』すまないのさ、電話に出させてもらうのさ。はいもしもし?。」

「何だつて!? 敵がUSJに乗り込んで来ただつて!? 今日は一―Aの生徒が使っている筈だよ、生徒の安否はどうなっているのさ!?!」

(USJ:今日の基礎学で使う訓練場かッ。鉄壁の防御を誇る雄英を

突破または侵入した敵、おそらく烏合の衆だけでは無い筈だ。ならば皆が危ない！」ガタツ

「分かったのさ『Pi!』」陽神カルナ君、何処に行く気なのさ？」

「本来ならば俺は此処に留まり、教師陣が応援に向かうのだろうが生憎と俺は友人達を見捨てる程出来た人間では無い。故に俺はそのUSJとやらに向かわせてもらう。」

「…陽神君、応援に向かう教師陣はもう少し時間が掛かるのさ。だからこそこんな事一生徒である君には言うべきでは無いのさ、こんな事を言つては教師失格なのさ。だけれど陽神カルナ君、君にオーダーを出すのさ！教師陣が応援に向かうまでの間応戦してくれている生徒では手に負えない敵がいるかもしれないのさ、だからこそ君には彼らを救いに行つてほしいのさ！」

「了解した、その注文心して完遂させてもらう。」

「ありがとう陽神君、これはUSJまでの地図なのさ。そこの車で向かうよりよっぽど君の方が早いはずなのさ。」

「礼を言うべきはこちらの方だ、友を救う事に許可を頂けた事に感謝を。早速向かわせてもらう、ではな。」

今まさに敵達と戦っているであろうクラスメイト達に応援に行くため炎を纏い鎧を装着し、校長室を出て行った。後に残ったのはその背に英雄の影を見た根津校長だけだった。

所変わつて此処は現在生徒達や教師が敵達と戦っているUSJ。乗り込んできた殆どの敵達はゴロツキと言えるような連中ばかりであり生徒達でも十分対処可能な連中であつた。

しかし一部はプロヒーローである教師達でも苦戦させる實力の者も居た。それが今スペースヒーロー13号を戦闘不能まで追い込んだ黒い靄を纏った敵、黒霧である。

しかし隙を突かれて飯田に逃げられ教師陣が応援に駆け付けると判断した為手を体中に着けた男、死柄木と対平和の象徴用の改人脳無と撤退しようとしていた。

「ああ、そうだ撤退する前に平和の象徴の矜持を少しでもへし折っておこう。」

死柄木のその一言と共に高速で緑谷・峰田と同行していた蛙吹に接近し先ほど相澤にやった様に蛙吹を崩そうとした。

それを阻止したのがまだ戦意喪失していなかった相澤だったが脳無に叩きのめされ気絶してしまった。

緑谷もまた蛙吹を助けようと拳を振るったが死柄木に当たる前に脳無によって防がれ逆に捕まり今度は蛙吹と峰田までも崩そうと死柄木は腕を伸ばす。

(駄目だ、やられるっ！どうすればっ！)

その時だ、USJの天井を突き破り炎の玉が落ちて来た。その衝撃で死柄木と脳無が吹き飛ばされたが黒霧によってキャッチされた。

緑谷達はその降って来た者の後ろ姿を確認して安堵した。現時点で1-A最強とも言える生徒、今日の基礎学は校長に呼び出されていた為遅れていた。

「お前さあ何なんだよ、急に降って来たかと思えば。痛いなあ、お前の炎で火傷しちゃったじゃないか。てか誰だよ？」

「俺の友人達を傷つけようとした者に容赦などする気もない。我が名は陽神カルナ、諸事情あって遅れたこの者達のクラスメイトだ。友の窮地、そして校長からのオーダーにより参じた。」

「おいおい、嘗められたモンだなあ！雄英がよこしたのはこんなガキかよー！」

「不満か？奇遇だな、俺もお前達風情に我が槍を振るわなければいけない事に遺憾だ。中身の薄いお前達よりもクラスメイトと武を高め合う方が余程建設的だ。」

「いきなり来て、しかも癩に障る奴だなあ！脳無っソイツをやれ！」

カルナの言にイラつき脳無に指示した死柄木。脳無は命令通りカルナに駆け出そうとしたら今度はUSJの出入口が吹き飛ばされたのだ。

「っ今度は何なんだよ！」

「応援だ、この学校で最も頼もしい存在のお出ました。」

担任である相澤が倒れ、蛙吹と峰田が殺されようとしていた時に現れたカルナとオールマイトという希望が先ほどまで感じていた絶望感を押し流したのだ。

しかし死柄木達からしてみればオールマイトは当初から狙っていた標的だ。絶好のチャンスだと思えば脳無に指示を出す。

「命令変更だ、あのガキより先にオールマイトを「何処を見ている。」は？」

命令を出されている途中の脳無をカルナが横から槍で薙ぎ払い吹き飛ばした為に中断されてしまった。

脳無は再生を始めているがカルナに槍で殴られた腕はバキバキに折れ曲がっていた。

「凄まじい再生力だな、敵達の中でお前が一番手強そうだ。校長からのオーダーもあるが故に俺が貴様の相手をさせてもらう。」

「本当に何なんだよ：アイツ。脳無はショック吸収も持ってるんだぞ、オールマイトの攻撃を耐えられる様に作られてるのに何で槍で殴っただけで腕が折れるんだよ！」

既に脳無とカルナは戦闘を開始しており、それによって起こる轟音に死柄木の指示はまともに伝わらないだろう。

「死柄木弔！オールマイトがこちらに来ています、どうしますか！」

「向こうから来てくれたんだ、予定通りここで殺す。黒霧、2体目の脳無を出せ。」

## USSJ：不穏な嚆矢 後編

カルナは脳無と呼ばれる敵を首魁とその補佐だと考えられる手だらけの男、死柄木と黒い霧に包まれた黒霧から遠ざけて一人で受け持っていた。

しかし一瞬目を死柄木と黒霧に向けた時、黒霧から自身が現在戦っている敵と全く同じ姿のもう一体の脳無が現れカルナとほぼ同時に到着したオールマイトと戦い始めたのだ。

（複数体存在するのか、俺やオールマイトなら問題無いが他の三奈達には脅威以外の何者でも無いな。体中に手を付けたあの男はコイツをショック吸収と言っていたが、俺が折り砕いた腕は数秒で回復した。ありえないが複数の個性を持っているという事か。早々にケリを付ける必要があるか。）

カルナに脳無が殴り掛かるが避けると槍を振るい切り裂き、殴り碎き炎弾を飛ばして吹き飛ばし焼く。その衝撃で空気は切り裂かれ辺りは灼熱の大地に変わって行く。

確かにショック吸収も超回復も厄介だと感じたがならばそれを上回れば良いと言う何とも脳筋チックな考えで戦っている。

それでも翻弄しているのだから英雄の力は本物なのだろう。カルナにとってこの脳無と言う敵は決して弱くは無いが強くも無いという相手だったのだ、油断や慢心ではなく武も無く技も無く闇雲に四肢を振り回すだけ怪力達磨相手にそこまで脅威を覚えなかった。まあそれでも衰えているとは言えオールマイトが苦戦している相手に此処まで大立ち回りを繰り返しているのが異常なのだが。

そうこうしている内にオールマイト達の方に爆豪・切島・轟が駆けつけて来た。

「おいおいマジかよ、オールマイトと互角の相手をカルナは一人で戦ってやがる。やっぱり戦闘訓練の時は実力なんざ殆ど出して無かったってえ事かよ！」



「凄いよカルナ君、回復されてるけどもう数十回は叩きのめしてる。でも決定打になって無いんだ。」

「アレが英雄の力ってか…、クソ！悔しいが強え！」

「加勢に行った方が良いんだろうが、オールマイトの方にも陽神の方にも近づくだけで余波で吹き飛ばされるな。」

カルナと戦い既に何度もボコボコにされている脳無だが馬鹿では無いらしくある程度カルナのパターンを理解し回避や防御を取ってきている。まあその分カルナは速度と威力を上昇させているのだが。

そしてカルナは薄々感づいていた事が確信に変わりつつあった。

「どうした、最初よりも回復速度も防御力も落ちてきているぞ？おそらくだがお前にも限界が存在するのではないか？それとも既に立つのも限界なら膝を付き休憩とするか？勿論その間に捕縛させてもらうが。」

「…!!」

喋る事は無いがカルナの物言いに先程よりも脳無の攻撃が苛烈になった様な気がした。自我が消滅している様な相手でも逆撫でさせるのがカルナが時折見せる毒舌は一種の精神攻撃なのかもしれない。

そして脳無のがむしやらとも言える拳がカルナの鳩尾に入り壁の方まで吹き飛ばしたのだ。それを見た死柄木は不気味にほくそ笑んだ。

「ハハ、ハハハっ！やったぞ！黒霧、俺の脳無がああ生意気なガキを殴り飛ばしたぞ！」

「ええ、力はオールマイトと同等。それを腹部に食らって吹き飛んだのです、ただでは済まされないうでしょう。」

「っ陽神少年!!」

オールマイトはその光景に名を叫び死柄木と黒霧は安堵し嘲笑った。

オールマイトと同等の脅威かもしれないと感じ本来は使う予定の無かった2体目の脳無を使うハメになった原因のカルナを殺せたと思ったからだ。

◆ 所変わってここはUSJ出入口近く、カルナやオールマイルト達の戦いを見ていた芦戸達はカルナが殴り飛ばされたの見て戦慄した。

「か、カル　カルナ？・カルナアアア！」

「三奈ちゃん行っちゃダメ！あっちに行ったらダメだつて！皆三奈ちゃん抑えるの手伝つて！」

「放して！だつてカルナがあ、カルナが！」

らしくなく酷く取り乱し、いつも呼んでいるカルナの渾名を忘れそれなりに離れているだろうカルナの元へ駆けて行こうとする芦戸を砂藤達がどうにか抑えた。

抜け出せないと理解するとそのままへたり込んでしまった。その姿に抑え込んでいた手を放すと麗日や砂藤達はどう声を掛けていいか分からなかった。

しかし此処で屈しないのが英雄ヒーローという存在なのだろう。

「カル、え？」

◆ カルナが吹き飛び激突し崩れた瓦礫の方を見て一しきり笑った死柄木達はオールマイルトや緑谷達の表情を見て笑みを深めると脳無達を使ってオールマイルト殺害を遂行しようとした。オールマイルトは2体目の脳無と戦う事で抑えられており、カルナと戦っていた個体を呼び戻して戦わせれば勝てるかと踏んだのだ。

「あのガキも死んだ、これでお前も終わりだなオールマイルト！」

「くっ！貴様らよくも陽神少年をつ。」

「他人の心配してる余裕かよ？脳無そのまま拮抗してるよ、最初の奴も呼び戻して2体で鬪り殺しにして」

死柄木がオールマイルト殺害の命令を出そうとしたその時だ。

「アグニよ。」

殴り飛ばされ埋もれていたカルナは周囲の瓦礫を燃やし尽くして再び立ち上がったのだ。脳無の攻撃で確かにダメージは負ったのか薄っすら血が滲んでいたが炎を噴出すとともに修復を完了させた。

これこそがカルナが持つ鎧型の防御宝具【日輪よ、具足カヴァーチャ&クンダーラとなれ】である。あらゆる攻撃を減衰させ、装着者を致命傷すらも瞬時に回復させる最強の防御だ。並みの攻撃ではかすり傷すら負わず事は出来ず、脳無の攻撃も僅かに血が滲む程度にまで抑えられたのだ。

「痛みを感じたのは久方ぶりだな、そしてお前の攻撃の限界も知れた。さて第2ラウンドと行こうか。」

「ハア!?何なんだよお前え、あれだけ脳無をボコボコにしておいてその上防御力も高いとかオールライト以上のチートかよ!」

「死柄木弔!どうか落ち着いてください。あの少年は後回しにしてオールライトだけでも殺しましょう、我々が脳無と連携すれば今度こそ倒せる筈です。」

「そうだ、そうだよなオールライトを殺さなくちゃ。」

勝てると思っていたのに急展開が起こった事で死柄木はボリボリと首を掻きむしり黒霧に宥められていた。

そして最初の目的であるオールライト抹殺の遂行しようとする。

「お前達程度ではオールライトを倒すなど不可能だ、彼は平和の象徴だぞ。」

「そういう事言われちゃうと本気以上の本気を出すしかなくなるよねえ!陽神少年、こんな事を言うのはアレだけでもう一体は頼めるかい?」

「元よりそのつもりだオールライト。次で決める、安心してほしい命までは奪わない。」

その返しに満足するとオールライトは脳無と再び対峙し真正面からの殴り合いを始めた。それだけで周囲は暴風が吹きすさびカルナ以外は立っておくのがやつとの状態で近づく事も出来ない。

カルナはカルナで先程まで戦っていた脳無の元まで向かうと槍を構えた。

「待たせたな、だがこれで最後だ。お前は十分消耗し、尚且つ奴らの指示が無ければ自発的に動く事も出来ない様だしな。故に少々遠方まで吹き飛んでもらおう。」

カルナと脳無は同時に駈け出し先程よりも壮絶な槍と拳の戦闘を繰り広げる。オールマイト側の暴風とぶつかり超強力な嵐の中にあるようだ。

しかしそれもじきに終わる。脳無の一際大振りな攻撃を躲し懐に潜り込み槍で空中に打ち上げたのだ。

そしてカルナの瞳は爛々と赤く輝く。

「決別しろとは言わん、しかしその天命とよく向き合う事だ…つ  
【梵天よ、地を覆え】!!!」

所謂眼からビームでオールマイトと同様に天へ吹き飛ばす。ここでの捕縛は難しいと判断した為本来ならあの脳無相手でも跡形も残さず殺せる宝具だがかなり加減し、吹き飛ばす程度に留めたのだ。

因みに実際に眼からビームを放っている訳では無くカルナが持つ強力な眼力を飛び道具として転用しているだけだ。

「H A H A H A、全盛期なら5発でいいものを300発近くも放ってしまつたよ。衰えてしまつたよ。」

「俺もあのような大振りに吹き飛ばされるとは未だ精進が足りなかつたようだ。修行は今よりも厳しくしなくては、な。」

『さて、次はお前達の番だ。』

そう言うのとカルナとオールマイトは死柄木達に槍の穂先と拳を向けて睨み付けた。

そう宣言された死柄木は苦虫を噛み潰したような表情でプルプルと睨み付けた。未だ色々と実力を秘めていそうな余裕を見せるカルナとボロボロになりながらも戦意を昂らせているオールマイト。自分達は脳無を失っている、回収しようにも位置が分からなければ黒霧にもどうしようも無い。

はつきり言つて勝てる要素が無い、それが見えないほど死柄木は愚者では無い。一通り罵倒を口にするのとチンピラを残して黒霧と共に

撤退していった。

未だに残っていた敵達はその後駆け付けた教師達によって鎮圧され事態は収束していった。

オールマイトはトウルーフォームに戻る前に姿を隠し事なきを得ていた。